



『海を見たことがなかった少年  
モンドほか子供たちの物語』  
J・M・G・ル・クレジオ 作  
豊崎光一・佐藤領時 訳  
(集英社文庫 1995年)



『カトリーヌとパパ』  
パトリック・モディアノ 作  
ジャン＝ジャック・サンベ 絵  
宇田川悟 訳 (講談社 1992年)

## フランスの 二人のノーベル賞作家

評者 中村俊直  
(大学教員)

二〇〇八年と二〇一四年に二人のフランス人の作家がノーベル文学賞を受賞しました。二〇〇八年にはジャン＝マリ・ギユスターヴ・ル・クレジオ（一九四〇年生まれ）が、そして昨年の二〇一四年にはパトリック・モディアノ（一九四五年生まれ）がその榮譽に浴しました。フランス人のノーベル文学賞受賞者としては、ル・クレジオが十四人目、モディアノが十五人目となります（ただし一九六四年のジャン＝ポール・サルトルは辞退）。この二人の作家は、それぞれ少年少女を主人公にした短編小説を書いています。その作品の紹介です。

ル・クレジオ著

『海を見たことがなかった少年』

これは八つの短編からなっている作品集です。そのうちの一つがこの本全体のタイトルのにもなっている「海を見たことがなかった少年」

中村俊直（なかむらとしなお）  
お茶の水女子大学教授。専門は現代フランス文学、日仏比較文学。

年」です。

この八つの短編は多かれ少なかれ子どもが主人公です。しかしその子どもは、日常的にどこにでもいそうで実はそうではないという子どもです。いわばこの世界とは別の世界に属しているような子ども、異次元の、または神話的次元の世界に属しているような子どもです。私はこの本を読みながら、宮澤賢治の『風の又三郎』に登場する高田三郎を思い出しました。あまりにも異世界の雰囲気を漂わせているために、周りの子どもたち皆から「風の又三郎」と呼ばれる少年を。

「海を見たことがなかった少年」の主人公のダニエルは、ある日突然、友人たちの前からも両親の前からも姿を消してしまいます。彼は、本当の海、「彼だけのための海」を見るために旅行に出たのです。そのような海を見いだしたダニエルは、ひたすら海と戯れます。

その海との交流の情景がこの短編小説の大部分を占めています。ダニエルは海と一体化することによって無上の幸福感を味わいます。

この本に収められた別の作品（「リュビ―」では、自然との一体感が次のように印象的に描写されています。

「陽の光が顔を灼くように照らしていた。光線は、指、眼、口、髪を通して彼女（リュビ―）と呼ばれる女の子）から出ており、岩場や海の輝きと一緒になっていた。」

このように、この短編集ではどの小説でも自然の描写が質的にも量的にも重要な位置を占めています。その自然は、人間と対立してその強大な力で人間の存在を圧倒するような自然でもなく、その崇高さや美しさで人間の精神を畏怖させるような自然でもありません。ましてや四季折々に人間の心情に「もののはれ」を感じさせるような自然でもありません。

ここで描かれているのは、すべての生命の誕生の源である自然であり、人間の文明が発達する以前の原初的な力を内包している自然です。そのような自然と一体化して、自然が持っている原初の豊饒な力を取り戻すこと。それができるのは子どもだけであって、文明化された社会の中で成長しきった大人にはできないことだと作者は言いたいのでしょうか。

ヨーロッパ文明への批判的な視点は、ル・クレジオの文学活動において一貫している視点です。彼はヨーロッパに対する異文化圏に好んで身を置き、そこから西欧を支配する文明を相対化し、さらには批判することを重視していました。この小説もそのような視点から書かれていると解釈できます。

前衛的な作風が高く評価されたル・クレジオですが、意外なことに、子ども向けの絵本も書いています。『木の国の旅』<sup>註1</sup>というタイト

ルの絵本で、男の子が森の中を旅して、さまざまな樹木と交流するというお話です。やはり自然との一体感がテーマです。

### パトリック・モディアノ著

### 『カトリーヌとパパ』

ル・クレジオが、実験的な、それ故少し難解な作風（特に初期は）であるのに比べ、パトリック・モディアノの小説はわかりやすい作風です（といってもその見せかけのわかりやすさにだまされてはいけないのですが）。

『カトリーヌとパパ』は次のような物語です。カトリーヌは現在ニューヨークでバレエ教室を開いてバレエを教えています。彼女は教え子の子どもたちのバレエの練習を見ながら、自分も三十年前にパリでバレエを習っていたことを、優しいパパと二人で暮らしていたことを思い出します。その思い出がこの物語の

ほぼ全体を占めています。

この作品の登場人物は皆謎めいています。それは作者がすべてを明確に説明するということをしないからです。

カトリリーヌが通っていたバレエ教室の先生は、生粋のフランス人であるにもかかわらず、ロシア人風の偽名を使い、フランス語もことさらロシア語なまりで話します。カトリリーヌのバレエ教室の友達のおデイルは、大豪邸に住んでいるお嬢さんですが、ある日突然、バレエ教室に来なくなりました。その理由は「レッスンを払えなくなつたから」です。それに、そもそもカトリリーヌのパパがどんな仕事をしているのかもよくわかりません。

作者はパパとカトリリーヌの生活を断片的に語るだけで、伝統的な小説のように、小説の舞台となる情景をこと細かく描写したり、登場人物を詳細に説明したりするということは

一切しません。むしろ意識的に言わないでおくことによって読者の好奇心を宙吊りの状態にします。それがこの小説の重要な技法です。

この物語の冒頭で、この小説の雰囲気を読んでいるような象徴的なエピソードが語られます。カトリリーヌは普段は眼鏡をかけていますが、バレエのレッスンの時には眼鏡をはずします。カトリリーヌは眼鏡をはずした時のことをこのように語ります。

「めがねをはずすと、まわりのすべてがぼやけてにじみ、(中略)世界はなめらかになって、ほおにふれる大きな枕のように心地よく、ふわふわしたうぶ毛のようになるのです。(中略)めがねをかけると、すべてものが、いつものかたさどくつきりした形をとりもどします。世界はあるがままに見え、もう夢を見ることもできませんでした。」

ここでは世界をはっきりと説明するのではなく、むしろことさらぼかして描くことが重

要です。小さな女の子からの視線で描くこと、そしてその体験を三十年後に思い出として語る。こと。モディアノはいわば二重にフィルターをかけて、謎と郷愁に満ちた世界を描き出します。

ジャン＝ジャック・サンペの絵もこの本の中で重要な役割を果たしています。それは単なる挿絵というよりは、文章と一体化して、セピア色の懐かしさが漂う世界を作り出しています。このサンペは、児童書「プチ・ニコラ」シリーズの挿絵も担当した画家です。

しかし、この作品はそれだけではありませ

ん。  
パトリック・モディアノの父親はギリシア起源のユダヤ系フランス人です。そして「モディアノ」という名前はイタリア風の名前です。もしかししたら、父方のルーツをさらにならばイタリア起源ということになるのかも

しれません。彼の母親はベルギー人です。父親は第二次世界大戦中のナチス占領下のパリで、危険を冒して、ユダヤ人の身分を隠して潜伏していました。そんな時にパトリックの母親となるべき女性と知り合いました。

このような出自のために、モディアノは自らのアイデンティティーに対する不安定感を常に抱いています。

モディアノはある雑誌のインタビューに對して次のように答えています。

「いかなる伝統にも、またどんな国家的・歴史的過去にも、自分は根ざすことができないという感覚、つまり自分はデラシネ（故郷喪失者、根無し草）だという感覚をもっています。」（松崎之貞著『モディアノ中毒』より）  
『パパとカトリーヌ』にも、そのような自己のアイデンティティーに対する不安感がかすかに漂っています。

カトリーヌのパパはロシアから移住してき

た移民の息子です。ママはニューヨークからやって来たダンサーです。その二人がパリで知り合つて恋におち、カトリリーヌが生まれましました。しかしママはフランスでの生活がなじめず数年してアメリカに帰つてしまいます。

その後数年間、カトリリーヌはパパと二人だけでパリで生活します。そしてこの物語の最後で、カトリリーヌとパパは、ママと暮らすためにアメリカに向かつて旅立ちます。それから三十年たつて自分の過去を確かめようと子ども時代のことを思い出すカトリリーヌ。

このように過去の思い出の中に自らのアイデンティティーを探索するというテーマは、モディアアノの文学世界においては重要なモチーフです。例えば一九七八年発表の『暗いブティック通り』<sup>き</sup>は、記憶を喪失した主人公が、自らの失われた過去を必死に取り戻そうとする小説です。この小説は同年の「ゴンクール賞」(日本でいえば「芥川賞」に相当するか)

受賞作で、著者の代表作の一つです。そう考えると、ニューヨークの町で三十年前のパリの生活を思い出す行為は、自分のアイデンティティーを確認する作業であるとも言えます。

なお、二〇一四年にはノーベル経済学賞もフランス人のジャン・ティロールが受賞しました。しかし大方のフランス人にとっては、同胞が経済学賞よりも文学賞を受賞したことのほうがよほどうれしいようです。何といってもフランス人は、フランス語が世界で一番美しい言葉だと信じて疑わないのですから。

#### 注

- 1 ル・クレジオ著 アンリ・ギャルロン絵 大岡信訳『木の国の旅』文化出版局 一九八二年
- 2 松崎之貞著『モディアアノ中毒』図書刊行会 二〇一四年
- 3 パトリック・モディアアノ著 平岡篤頼訳『暗いブティック通り』白水社 二〇〇五年